

所属・資格 体育学科・准教授

申請者氏名 金野 潤

研究課題	柔道の「動き」のスポーツ化と柔道実践者の実態「柔の理」への認識に焦点をあてて
報 告 の 概 要	<p>『武道は、日本古来の尚武の精神に由来し、長い歴史と社会の変遷を経て、術から道に発展した 伝統文化である。勝敗の結果のみにおぼれず、武道の真髄から逸脱することのないよう自省するとともに、このような日本の伝統文化を維持・発展させるよう努力しなければならない。』本研究の目的は、伝統文化としての柔道のローカル性を、運動の核心部分である「動き」という視点から把握しようとするものであり、柔道のスポーツ化という現象を我が国の現代柔道実践者の動きや技の実態から読み解くことを目的とする。すなわち「嘉納が古流柔術から継承した柔道において『よし』とされた動き方や技の掛け方を、現在の柔道家がどのように意識しているか」という観点から、柔道のスポーツ化の実態の把握を試みる。本研究の射程は、従来のスポーツ化で問われてきたような柔道が内包する修養主義的なマインドにはない。あくまでもそれは、現代の選手が繰り出す技や動きの実態にあり、端的には、柔道が継承してきた武技・武術の特徴的な動きの原理原則を現在の競技者が踏まえているかどうかを吟味することにある。そのため、こうした動きの原理原則は必然的に、バイオメカニクスの規定される量的な変化とは大きく異なり、柔道実践者の基本姿勢や考え方の基軸に関わって表出され顕在化される動きの質に関わるものであることは想像に難くない。</p>
告 の 概 要	<p>クラスター1「柔の理」を構成する2因子のうち「氣息を外す動き」因子の得点のみがやや高く、「陰陽の使い分け」因子が有意に低いことから、「氣息傾向群」と命名した。クラスター2両因子の得点が他に比べて有意に低く、「柔の原理」を重視していないという特徴があるため、「術理軽視群」と命名した。クラスター3については、両因子の得点が他の群に比べ有意に高いという特徴があり、「柔の理」を比較的重視しているグループとして「術理重視群」と命名した。「氣息を外す動き」因子が、「強い力に対してはすかしたりそらしたりする - より強い力を出そうとする」など具体的な動きやテクニックをあらわす得点であり、どちらかと言えば身体動作レベルの志向性であるのに対して、「陰陽の使い分け」因子は「相手が闘志満々のときには逆に冷静になる・負けずに闘志を燃やす」などの状況判断をあらわす得点であり、どちらかと言えば意識レベルの戦術思考である。今回のクラスター分析においては、「陰陽の使い分け」の因子得点のみが高い「陰陽傾向群」は、クラスター数を3と設定した以外の分類でも見出されなかった。</p>
報 告 の 概 要	<p>状況判断という意識レベルの問題は現実的な動作志向に連動することが多く、そのみが独立して発現することは少ないことを意味するものと思われる。これに対して、具体的な動きやテクニックなどは、状況判断と切り離して、そのみで選手がコントロールできるのではないかと推察するが、このことに関しては本研究のみで断定的な知見を導くことは不可能である。詳細な検討は今後の研究に委ねたいと考える。すでに有山ほか(2016)の研究において、創始者・嘉納治五郎の意図に反して「柔の理」が現代の柔道家に重視されていない状況が指摘されていたが、今回の調査によりそれは2の実践者層にみられるような競技志向の柔道実践者に特徴的な傾向であり、現代の柔道においても、勝敗に重きをおかず、愛好的な姿勢や技を究(極)めようとする3の実践者層は、攻防時に「柔の理」を重視する傾向があることが確認された。</p>

<p>研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所</p> <p>研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者</p>	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>柔道の「動き」のスポーツ化と柔道実践者の実態：「柔の理」への認識に焦点をあてて 有山 篤利，中西 純司，島本 好平，<u>金野 潤</u> (体育学研究 64 巻 101-117 2019 年 6 月)</p>
--	---